

まちづくり講演会【概要版】
建築系愛知 15 大学共同企画展 2019 Talk Session
名古屋のまちを語る vol.5
—名古屋の水辺空間の魅力を増強せよ—

日 時：2019年12月21日(土) 17:30~19:00

会 場：名古屋都市センター 11階ホール

パネリスト：

井澤知且（名古屋学院大学 現代社会学部長）
柳田哲雄（NPO 法人伊勢湾フォーラム 理事）
丹坂和弘（レトロ納屋橋まちづくりの会 事務局長）
横井英二（名古屋市緑政土木局河川部 主幹）

コーディネーター：

恒川和久（名古屋大学大学院工学研究科 准教授）



1. パネリストによるトーク

□水辺空間とまちづくり

【井澤】

中川運河は、10キロのうち7キロは直線になっている。直線のところは風の道でもあるが、景観的にも非常に面白いビスタを形成することができる。そういう意味では、水辺や運河の持つ景観というのは、非常に面白いものが要素として組み立てられる場所だと思う。

■水辺空間とは

つまり、水辺というのは、一つは、「景観の主軸となる水辺空間」といえる。水面は、周りのものを映すという意味では、キャンパスだ。また、水面に映る光や陰影といった独自の景観を創出する。そして、見通しのきく景観軸と橋梁デザインというのは、水辺ならではの景観だと思う。

名古屋学院大学の白鳥キャンパスの近くにある「太夫堀」には、カモメ、カモ、ハト、カラスが多数飛んできて、休憩したり、水飲み場として使っている。また、太夫堀には様々な魚類が生息しており、ボラを追いかけて海鵜も飛んでくる。すなわち、ここは「ビオトープなる水辺空間」といえる。いわゆる人間と生物の共生空間だと思う。それが二つ目。

そして三つ目は、「水辺のゆらぎと結界」の場ということ。水辺というのは、例えば陸と水の接点ということで、「異相を結ぶ結界」と言える。また、「水辺は心の安らぎを生む」とか、「結界は心のゆら



ぎを生む」とも言う。ある人によれば、「水辺に男女が佇むと、心がゆらぐ」とのこと。ちなみに、「水辺の近くには必ずラブホテルがある」との説があるが、調べてみると、堀川沿いにはたくさんあり、新堀川沿いにはわずかにあり、中川運河沿いにはほとんどない、という結果だった。

■歴史的な文脈を踏まえた土地利用

土地利用については、その土地の歴史的経緯を知ったうえで提案すると、より厚みができて説得力が出る。要するに、歴史的な文脈を踏まえた土地利用を考えなければいけないと思う。

新堀川も含め、堀川は江戸時代から物流の幹線だった。かつ、木材の集積場としての白鳥貯木場があったが、それが埋め立てられて、名古屋学院大学、国際会議場、白鳥庭園などができたわけだ。

また、中川運河は、名古屋駅と名古屋港を結ぶ物流幹線で、名古屋の重工業化を図るために造られた運河だ。それは、「中京デトロイト構想」を実現する、すなわち自動車産業を興すということだった。だから、そこには臨港地区としての制約があるのだ。

■現在の暮らしと切り離された空間を取り戻す

では、今日の暮らしと切り離された水辺をどう取り戻すのか。「山際」と「山の端」という言葉がある。山際は、空から見た山との接点。その接点を山側から見たのが山の端。そうすると、「水際」は陸から見た視点だが、「水の端」という言葉はほとんど聞いたことがない。たぶん、水からアプローチするような使われ方があまりないのではないかな。

カリフォルニア州アーバインの例だが、日常生活において水をうまく使った住宅地がある。住宅地に水辺があるという意味だ。住宅地を造るために、もともとあった水路をせき止めて、池を造り、周りに住宅を配置している。「水辺付き住宅地」というわけだ。ここは雨がほとんど降らず洪水などの心配がないという気候条件を踏まえたうえでの取り組みなので、日本では難しいだろうが、子どもが釣り道具を持って池に行く様子も見られ、これは「日常生活のなかに住民と水辺の接点を生み出す」という例だ。

シアトルの Gas Plant Park には、「水辺のここに在った」ということの象徴として、使われなくなったプラントが残されている。非常にアーティスティックな造形のプラントで、水辺の際に建っているが、このように「歴史的な文脈を踏まえた水辺のモニュメント」は貴重だと思う。

また、夜市など、「日常生活に溶け込んだ水辺」という使い方がある。こういうことが今では非常に求められているのではないかなと思う。

今の暮らしと切り離された水辺空間を取り戻すには、まちづくりにおいて、「貴重な地域の資源を、水辺の特性を生かし、歴史的な文脈に沿って、市民のために活用を図っていく」ということだと思う。

□中川運河のいまと中川運河定期船のガイドとしての私

【柳田】 NPO 法人伊勢湾フォーラムの柳田です。年間 30 回ほど中川運河を往復しながら、ガイドとして中川運河の魅力を伝えています。

■中川運河の歴史と概要

中川運河は、笹島へ行く「北支線（約 700m）」、かつては松重閘門を介し堀川につながっていた「東支線（約 1.1km）」、そして 2 つの支線が合流した地点から名古屋港までの「幹線（約 6.4km）」を合わせると全

長約 8.2km。幹線の幅は約 64~91m、支線の幅は約 36m だったが、現在は護岸工事によりそれぞれ



狭くなっている。水深は、中川口通船門の所で水面が一定に保たれており、約 2.8～3.0m。

中川運河の元となる川は、現在の笈瀬（おいせ）地区（名古屋駅西）から流れる「御伊勢川（現、笈瀬川）」と、その下流の「中川」と呼ばれる川。その川幅を広くして深くしたのが中川運河。

中川運河建設の目的は、3つあったと言われる。

一つは、笹島の貨物駅が昭和 4 年に造られたが、鉄道貨物を港にいち早く運ぶために造られた。いわゆる鉄道輸送と舟運のドッキングが目的。

二つ目は、堀川の混雑を緩和するため。松重閘門を造り、堀川と中川運河を結び、堀川から名古屋港にいち早く運べるようにした。

三つ目は、「沿岸への工場誘致」、「運河の掘削土で沿岸の田を埋め立てて工業用地として販売」、「名古屋南部を一大工業地帯にする計画」のため。昭和 12 年ごろには工場が 87、倉庫が 81 立地し、昭和 40 年ごろまで中川運河沿川は一大工業地帯となった。

中川運河は、1926（大正 15）年に着工し、1932（昭和 7）年に全線開通。当時は、「東洋一の大運河」と言われた。閘門式運河で、水位が変動しないことが大きな特徴。水面の高さが変動しないので荷役が効率よくできる。また、周辺の地盤が低いので、高潮時の浸水防止を担った。

舟運の最盛期である昭和 39 年、中川運河には年間 75,000 隻（1 日平均約 200 隻）の船が通った。当時は名古屋港の岸壁整備が進んでおらず、大型船は沖合で錨をおろして泊まるため、その周りに「舢舨（はしけ）」が集まり、船から船への荷役作業「沖荷役」が行われた。その舢舨が活躍する土台として中川運河があった。

名古屋港における昭和 12 年の輸入品目は「羊毛、人絹用パルプなど」、輸出品目は圧倒的に「陶磁器」。また、平成 28 年の輸入品目は「液化天然ガス、鉄鉱石、原油、石炭など」、輸出品目は「自動車、自動車用部品等」。この間には貿易品目が随分と様変わりしていることがわかる。

最盛期には、名古屋港の貨物量の 20%以上が中川運河を利用して運ばれたが、昭和 40 年代後半になると荷物を積んだ船はほとんど通らなくなった。舟運はなぜ衰退したのか。

一つは、名古屋港の岸壁整備が進み、大型船が直接岸壁に着けるようになり、舢舨が不要になったため。二つ目は、昭和 43 年、現在の金城ふ頭にコンテナ船が登場し、コンテナ荷物は船から直接トラックへ運ぶため舢舨が戦力外になったため。三つ目は、トラックによる陸上輸送が増大したため。

■中川運河の現状と再生

現在、中川運河には平日のみ貨物船が入ってくる。主に四日市方面から、200 m³ほどの石油を運んでくる船が 1 日に 3 隻しか通らない状況。

中川運河沿いには、現在も遺構として、荷揚げ用クレーンが残されている風景が見られる。

中川運河には今も、ボラ、コノシロ、サツパ、マハゼなど、多くの魚類が生息している。

平成 24 年、名古屋市と名古屋港管理組合による「中川運河再生計画」が策定された。テーマは、「歴史をつなぎ、未来を創る運河 ～名古屋を支えた水辺に新たな息吹を～」。

運河の北の地区を「にぎわいゾーン」、真ん中を「モノづくり産業ゾーン」、南の地区を「レクリエーションゾーン」と分けし、それぞれの土地利用に合う形でにぎわいを取り戻すための様々な取り組みが行われている。

中川運河の北、ささしま地区は大変身した。また、運河の南地区は、かつて東邦ガスによる都市ガスの製造基地だった場所に商業施設ができ、大変なにぎわいを見せている。

2017年10月より、ささしまライブからガーデンふ頭、金城ふ頭を往復する定期船が土日、祝祭日に就航している。ささしまライブ乗船場、キャナルリゾート乗船場、みなとアクルス乗船場、ガーデンふ頭乗船場、金城ふ頭乗船場の5つの乗船場があり、それぞれがにぎわいを見せている。

■中川運河に期待すること

ガイドとして、「中川運河がこうあってほしい」ということを3つほど提案したい。

一つは、「魚と鳥の楽園 中川運河」。そのためには水質改善が必要になる。昭和12年から、実は名古屋港から毎日7万m³の水を取水している。その水は中川運河を北上し、松重閘門の隣にある松重ポンプ所から堀川に排水され、名古屋港へと循環している。

二つ目は、「水辺を楽しむ中川運河」。クルーズや水上スポーツ、水辺のウォーキングやサイクリングを楽しめるようにしたい。また、水上交通のネットワーク実現のためにも松重閘門を復活させたい。

三つ目は、「舟運とそれを利用した産業が盛んだった頃を偲べる中川運河」。沿岸に残る歴史的な建物などを保存活用していきたい。

また、「中川運河の本来の機能外の効用」が2つある。一つは、「都心のヒートアイランドを緩和する風の道としての役割」。南北に連なる運河は、名古屋の都心に涼風を届ける。二つ目は、「豪雨時の雨水調整池としての役割」。豪雨時に一時的に雨水を貯留し、水害を緩和することができる。

中川運河は、昭和の良き時代を物語る懐かしい風景と、広々とした穏やかな水辺を眺めながら飲食を楽しめる施設の登場など、新しい時代の到来を予感させる魅力に溢れている。そういう中川運河の魅力を1人でも多くの人に伝えたい。

□堀川・納屋橋まちづくり活動 ～歴史・文化の交差点「納屋橋」から～

【丹坂】 レトロ納屋橋まちづくりの会の丹坂です。私は、納屋橋生まれ納屋橋育ちで、このまちが好きで、まちづくりに取り組んでいます。

■歴史・文化を耕しながら

私どものまちづくりのテーマは、「都市の河川が、そこに住む人々の文化レベルを示す」ということ。「歴史・文化を耕す」を念頭に、「水辺の復権」と「舟運の復活」を目指して活動している。

■水辺の復権

水辺の復権に関しては、水辺空間活用、イベントの開催・誘致に取り組んでいる。それにより水辺の魅力を再発見し、にぎわいを復活させたいと考える。そこで、堀川の水辺で取り組んでいることを、以下、ご紹介する。

堀川沿い、特に納屋橋の水辺復活のためのイベント、「堀川フラワーフィスティバル」は今年（2019年）で13回目。市民が作った約400基のハンギングバスケットを橋の欄干に並べ、花で潤いのある空間を創っている。

「なやばし夜イチ」は、5年以上続けて取り組んでいるナイトマーケットで、毎月第4金曜日に開いている。3月、6月、9月は「三ヶ月夜イチ」といい、金土に開催。

地元のタカヤマさんが取り組んでいる「ナヤマルシェ」では、水辺にブースを出している。

「堀川ウォーターマジックフェスティバル」は、今年（2019年）で16回目。「堀川の水辺の可能性を実験的に引き出してみよう」というテーマで開催。2日間、水辺で楽しめる可能性を実験した。



堀川に浮かべたトロワ・リビエール号という船の中には、納屋橋と縁のあるカブトビールが飲めるバーがある。夜は船上でライブを実施。

また、周りもいろいろなイベントに取り組んだ。例えば、「堀川ヒュッテ」は、川床というか、少し川にせり出した空間をつくり水辺を楽しんでもらうイベント。「ポートランドリビング」というマーケットも水辺で展開。また、「なないろマーケット」、「夜イチ」など、水辺を楽しんでいただくイベントも実施。

■舟運の復活

舟運の復活に関しては、名古屋の都心の問題として「魅力スポットが点在している」ということがあるが、その点在スポットをつなぎ回遊性を向上させて、「いつのまにか歩いて楽しい名古屋」にしていけるのではないかと考えている。

名古屋のまちは2核1軸構造といわれるが、「田」の字を名古屋のまちの上に重ねてみると、名古屋駅と栄という2つの核を、真ん中の横線である広小路通が結んでいることがわかる。そして、その真ん中を縦線として堀川が流れているが、名古屋駅と栄を結ぶ軸との接点が納屋橋だ。納屋橋から堀川を北上すると名古屋城に行き、南下すると熱田神宮や名古屋港とつながる。つまり、名古屋港、納屋橋、名古屋城は結ばれているということ。

ここに堀川の舟運が復活すれば、「田」の字の上に配置された名古屋の魅力スポットである、ノリタケの森、産業技術記念館、円頓寺商店街、テレビ塔、大須商店街、ささしまライブ、徳川園などへのアクセスは格段に便利になる。その時には、納屋橋は、「名古屋観光の玄関口」にもなり得るだろうし、広小路通の往来も増えるのではないかと。これについては、過去にウォーターマジックで実験的に取り組んでいる。

納屋橋の船着き場から船に乗り北上すると、錦橋、桜橋、五条橋を通る。五条橋の辺りには円頓寺商店街がある。ここは、シャッター商店街が奇跡の復活を遂げたということで非常に注目を浴びている。また、四間道という古い土蔵造りの町並みも残っている。

五条橋から北上すると、キャッスルホテルの正面が見え、船が止まっているところが朝日橋で、そこに船着き場がある。朝日橋を降りて階段を上がっていくと、3分で名古屋城の正門にたどり着く。名古屋城は意外とアクセスが悪いが、堀川の舟運を使えば非常に簡単に行ける。

■堀川水質浄化・名古屋の文化度向上へ

「水辺の復権」、「舟運の復活」を目指し、様々なことに取り組んでいくなかで、堀川の水質も浄化し、名古屋の文化度も向上していくのではないかと考えている。

□堀川水辺の魅力向上とにぎわいづくり

【横井】 名古屋市役所 河川部の堀川総合整備担当主幹の横井です。私からは、名古屋市が現在進めている、新たな取り組みについてご紹介します。

■魅力向上とにぎわいづくりのための社会実験（2019年度）

新たな取り組みである「魅力向上とにぎわいづくりのための社会実験（2019年度）」については、市民アンケート等をもとに、堀川の新たな魅力向上に向けての社会実験を実施した。

昨年実施した市民アンケートは、「堀川でどのようなことを期待するか」という内容だが、「水辺を



楽しみながら飲食を楽しみたい」という意見が多かった。

そこで、「堀川に張り出したテラス」ということで、デッキが川面に少しかかっている場所で飲食を楽しむという社会実験を行った。利用者へのアンケート結果は、9割以上が「良かった」とのこと。また、「こういったものが堀川の沿川にどんどん広がるとよい」という回答が9割。「雰囲気が良い」、「常設にしてほしい」ということ。

来年度以降は、社会実験の成果を沿川の事業者等にアピールしながら、パートナーを組んで、堀川沿川にこういう取り組みを広めたいと考えている。

堀川を意識した土地利用については、「現在は堀川に背を向けている建物などが、将来的には川側を向かないか」ということを期待して展開していきたい。

「橋や護岸のライトアップ」についても非常に好評を得ている。現在は錦橋で実施しているが、今後は社会実験の成果をもとに、納屋橋地区全体に広げたいと考えている。

■魅力向上とにぎわいづくりに向けた調査検討（2019年度）

もう一つの取り組みは、「民間活力の導入調査検討等」。これは、いわゆる「マーケットサウンディング」ということ。行政は民間事業者に対していろいろな公募をかけるが、公募をかける前に民間の意見を聞くのがマーケットサウンディング。これを、納屋橋地区で取り入れるということで、現在3つの事業が動いている。

一つは、「水辺活用推進事業」。広場や遊歩道の活用ということで、様々なイベントが行われている。

二つ目は、「市有地の活用」。これは名古屋市の土地を民間に借地し、民設民営で事業に取り組むこと。これは、平成20年から令和5年まで、レストラン兼結婚式場を運営している。

三つ目が、「旧加藤商会ビルの保存活用」。この古い建物を活用して、地下1階には堀川に関する情報発信の場である堀川ギャラリー、市民団体の交流の場であるよろずサロン等がある。1階から上はタイ料理屋。このような様々な事業が、堀川沿いの地区でそれぞれ動いている。

今回のマーケットサウンディングで主に聞いたのは、「このエリアでそれぞれ動いている事業を一体的に活用できないか」ということ。そういったことを含めて今後の事業展開を検討するために、実際に業者の方と1対1でざっくばらんな話をしながら、「一体どのようなことが堀川に求められているのか」ということを見つけていきたいと考えている。

【恒川】 ありがとうございます。

2. トークセッション

●名古屋の水辺空間の魅力を増強するには、具体的にどうする？

【恒川】 本日のテーマは、「名古屋の水辺空間の魅力を増強せよ」ということだが、「具体的にやるべきこと」は多々あると思う。では、どこからどう手を付けるのか。そして、何をしていくべきなのか。そのあたりについては、名古屋市の横井さんからも「魅力向上とにぎわいづくりのために様々な事業を展開している」というお話があった。

そこで、それを実現する鍵となることは何か、ということをお聞きしながら、「名古屋の

水辺空間の魅力を具体的にどのように増強していくのか」という議論をしたい。

●水辺の活用においては、法規制と折り合いをつけながら

【井澤】 水辺の利用・改変にあたっては、やはり人命と財産を預かるが故に、非常に厳しい法的な規制がある。いわゆる水量や流れを阻害するような工事については厳しいわけで、川の中に柱を建てるなんてことは絶対にできない。だから、やりたいことは多々あっても、やりづらい。ちなみに、先ほど「ラブホテルは堀川と新堀川沿いに多く、中川運河にはない」という話をしたが、中川運河の沿岸は基本的には名古屋市所有地で、名古屋港管理組合が管理している臨港地区なので、土地利用規制でラブホテルなどは建てられない。まだ工場が残っているのもそういう規制が働いているからだ。

そうすると、市民のニーズに合った形で水辺空間の魅力増強を実現しようというのであれば、いわゆる法規制との折り合いをどの程度つけるのか。そういう部分は、行政だけが動いても変わらないと思う。市民の声がないと変わらないと思うので、そのへんのところを展開していくことが必要ではないか。規制緩和というのはお金もかからないので、そのへんを考えたいのだが…。

●行政としては、治水上の安全確保とともに、規制緩和も考えていきたい

【横井】 非常に耳の痛い話だ。もともと河川法というのは「治水」、すなわち安全の確保を第一目的としてきた。その後、ダム開発等があり「利水」という視点、そして平成に入ってから、水辺にはにぎわいが必要だ、水質浄化等も必要だということで、「環境」という視点も加わった。そういった流れのなかで、規制緩和の動きも当然ある。いま納屋橋でイベントやオープンカフェができるのは、まさに河川法において規制緩和ができてきているからだ。治水上の安全が確認されたエリアならば、そういった規制緩和につながっていくということだ。

また、新たな施策として、納屋橋で実施した川床、「親水テラス」について紹介した。堀川沿いは民間の土地だが、その民地から一步川際にせり出して実施したということ。今後は、例えば四間道や五条橋等でもそういう取り組みができないかと考え、社会実験を行っている。また、いま納屋橋ではイベントやオープンカフェにおいてのみ規制緩和が適用されているが、さらなる規制緩和ができないかも含めて検討しているところだ。行政としては、やれるところまでいろいろと取り組んでいきたい。

●行政に期待することは？

【恒川】 柳田さんや丹坂さんは民間の立場として、行政に期待すること、あるいは具体的に規制緩和してほしいことはありますか。

●中川運河沿いにある古い歴史的な建物を残せる仕組みを

【柳田】 中川運河の沿岸の土地は名古屋市が所有しているので、沿岸で事業を営んでいる人たちが他所へ出て行く時は、建物を取り壊して更地にして返すことになっている。そのため、古い建物、昭和レトロな施設など、中川運河がにぎわっていた頃を彷彿とさせるような建物が次々と壊されている。そういう建物を残せるように、できるだけ規制を緩和していただきたい。

長良橋の北の「にぎわいゾーン」では、特例を設けることで喫茶店や飲食店もでき、注目を浴びている。一方、中川運河の中間にある「モノづくり産業ゾーン」の地区は、非常に問題があると思って

いる。いずれは全部、野っ原になってしまうのではないかと懸念しているところだ。

【恒川】 確かに中川運河については、名古屋市の土地であることが、水辺の利用においては大きなハードルになっていると思う。実際に名古屋市は、中川運河の再生計画においてはゾーンを決めて取り組んでおられるが、その用途はかなり限定されているので、誰もが参画できるわけではない。ましてや昨今の台風や水害のことを考えると、住宅は造れない。「水際に住みたい」という人が今は少なくなったかもしれないが、規制が緩和されれば随分とやり方も変わると思う。

【横井】 現在、中川運河については、愛知ドビーのパーミキュラなど、民間活力を導入するような施策にも取り組んでいる。ただ、古い建物が除却されてしまうような心配も確かにある。本日の話は、窓口である住宅都市局にしっかり伝えたいと思う。

●まずは市民が「水辺をなんとかしたい」と思わなくてはいけない

【丹坂】 私が一番大事だと思うのは、妄想すること、「何をしたいか」ということでイメージーションを高めることだと思う。法規制が云々というが、本当にやりたいことなら何か方法があると思う。市民が「〇〇したい」と、本当に強い気持ちで思うかどうかだ。

水辺というのは、都会においては「自然との接点」だと思う。都会というのは、自然を徹底的に排除して、自然の脅威から自分たちの生活を守るための機能がたくさん施されている。要するに、文明の利器に頼った生活をしているのが都会だ。おそらくスマホとコンビニがあれば、今の若い人たちは生活できるだろうが、そういう生活をしていると、「名古屋らしさ」とか「名古屋ならではの」ということは生まれないと思う。今回、皆さんは水辺に行って、そこには自然を感じられのではないか。その自然というものをなんとか取り込もうとして、いろいろなプレゼンがなされたのだと思う。そういうことが、やはり文化を育むことだと思う。そういう意味で、水辺というのは、そこに住む人たちがイメージーションをたぎらせる場だと思う。まずは、「水辺でこんなことをしたい」という強い思いがなければ、規制緩和も何も始まらないのではないか。

●水辺での取り組みを、いかにムーブメントとして高める？

【恒川】 なるほど。実際に堀川や納屋橋関係ではいろいろな取り組みがされています。ただ、やはり「市民が何々したい」と思うような動きまでには大きくなっていないような気もする。「この場所をどうするか」と考えていくことがいかに名古屋にとって大事かということ、どのようにしてムーブメントとして高めていくのか。

●まずは動いて、関係人口を増やすことが大事

【井澤】 何にせよ、やってみることが必要ではないか。イメージーションすると同時に、それを少しでも実現していく。そういう動きと合わせて取り組まないと、妄想で終わってしまい、前に進まない。それで、その実現に際しては、最近では「関係人口」というものが取り沙汰されている。単に訪れるだけではない、そこに住んでいるだけでも駄目で、「そこに関わりを持ちたい人をどう増やすか」ということ。そういう人たちをいかに中に組み込んでいくかが大事だと思う。例えば、誰もが参加で

きる仕組みをつくって運動を広げていくことが必要ではないか。どうやって関わらせていくか、関わってもらえるか。そういう仕掛けを備えたプロジェクトに取り組んでいくべきではないかと思っている。

●歴史的な資源を残していくには？

【恒川】 例えば、円頓寺商店街のパリ祭は、たった数年で大変なにぎわいに広がっている。それは、仕掛けた人たちの思いがリアルな形になったということで、それが関係人口を増やしていくことにつながっているのだと思う。そういうきっかけは、納屋橋や堀川にはすでに十分あるような気がする。

さて、「歴史が大事だ」ということで、学生さんからも「今ある資源を残して活かしていく」という提案があった。一方、柳田さんからは、「古い建物などをなかなか残せない仕組みがある」という話があった。これは、どういう仕掛けをしていけば残せるのか。法規制でなんとかするしかないのか。名古屋は、きちんと残すとか、うまく活用していくという面がなかなか弱いところだと思うが…。

●かつての中川運河の活気を市民に伝えることも大事

【柳田】 中川運河は、北の「にぎわいゾーン」と、南の「レクリエーションゾーン」はそれなりの成果があがってきていると思うが、問題は、真ん中の「モノづくり産業ゾーン」だ。ここに古い建物を残すような取り組みをしていくというならば、現在も中川運河沿いで古い建物を使いながら操業している人たちの工場を訪れて、「昔は中川運河をこんなふうを利用して商売していた」という話を直接お聞きすることも非常に大事だと思う。1人でも多くの市民に、中川運河の良さ、昔の活気を知ってもらうことが必要だと思う。中川区役所は今年、「沿岸の3つの工場を訪ね歩く」というイベントを計画しているそうだが、そういう施策が必要だと思う。

【恒川】 井澤先生は「歴史的な文脈を踏まえた土地利用」という話をされたが、特に名古屋で考える時には、何か具体的な地区はあるか。

●「ここで何かやりたい」と思う人は、その歴史や町並みを継承する形で展開しているはず

【井澤】 名古屋でいうと、中級武家屋敷のあった白壁エリアは、600坪とか700坪の敷地に門と塀を構えた町並みができている。ただ、そういうところは相続の問題などで壊されて、そこには新たにマンションが建つわけだが、マンションの入り口には門塀が造られたりしている。要は、従来の町並みに合わせて門塀があると、「高級感が出る」と認識されているようだ。それが一つの町並みのデザインコードとして、暗黙のうちに残っていくような気がする。そうすることが民間事業者にとっては価格を上げることにつながる。そういうメリットを引き出せるようなうまい仕掛けが必要ということだ。

それから、昔から「魚ノ棚通（うおのたなとおり）」の辺りは料理屋がたくさんあったので、やはり今も料亭とか飲食店がそれなりに集積してきている。歴史の積み重ねの層の上に新しいものが積み重なっていく感じだ。それはたぶん、そこに新店を出店したい、そこで何かをやりたいという人は、おそらくそれぞれが歴史を踏まえてやっているからだと思う。

【恒川】 確かに…。では、横井さんにお聞きしたいが、四間道の辺りは古い建物を活用するなどの形で今や飲食店もたくさんできてきたが、そのあたりについてはどんな展望を持っておられるのか。

●「川」と「町並み」を一体的に、連携して取り組んでいきたい

【横井】 納屋橋から上流の名古屋城までの間、つまり五条橋とか四間道とか円頓寺商店街がある辺りについては、昨年度から護岸整備に着手した。地元のまちづくりの方などから意見をお聞きして、その上流の名古屋城までのエリアは、石垣風の少し古いレトロな感じでやっていこうかと思っている。その周辺の町並みについても、住宅都市局都市景観室がその沿川の建物の在り方について今年度から検討を始めたところだ。当然、川と町並みは一体なので、連携しながら取り組みたいと思っている。近くにある旧家の川伊藤家も、いま観光文化交流局が買い取って活用していく方向で動いている。それぞれがバラバラに動くのではなく、一体的に取り組んでいかなければいけないと思っている。

●今後に向けてのコメントは？

【恒川】 最後にあらためて、「名古屋の水辺空間の魅力を増強せよ」というテーマに対して、メッセージをお願いします。

●水辺に興味を持ってほしい

【丹坂】 ぜひ皆さんも水辺に興味を持っていただきたい。「水辺に住みたいと思う人は減った」という話があったが、「どうせ住むなら水辺がいいよね」という人を増やしたい。そういう人たちが増えれば、水辺の活用の仕方変わってくるだろう。「オフィスを構えるなら水辺がかっこいい」、「水辺って、いろんなことを発想できるから、コーヒーを飲む時も水辺がいいよ」と思う人たちが増えてほしい。

●船上から見る中川運河の魅力を再認識してほしい

【柳田】 私からの切なる願いは、中川運河のクルーズ体験をしていただきたいということ。笹島から船に乗って名古屋港まで、中川運河の魅力をぜひ水上から楽しんでいただきたい。

●実際に見て、調べて、考えて、仲間を増やして…

【井澤】 「今回、提案するために初めて中川運河に行った」という発言があった。やはり、水辺をどうするかを考える時には、水辺に関心を持つ必要がある。なんとなく堀川沿いを歩いたことはあっても、堀川とはどんな川なのか。歴史を調べたり、水質を見たり、そういうことはほとんどしてこなかったと思う。今回のように一人一人が考えて、テーマに対して提案をする。そして、そういう仲間を増やしていく。今後もこういう取り組みを続けていただきたいと思う。

●ぜひ一緒に水辺の事業を

【横井】 学生さんたちが発表された内容は、時間をかけて一生懸命考えられたのだろうと思う。発表も、また受け答えもしっかりされていた。名古屋市役所に就職すれば水辺に関する事業もできるので、よろしくをお願いします。

●この機会を、水辺のことを考える一端に

【恒川】 今後もこういった機会を持ちながら、名古屋の水辺空間について関心を持ち、実際に水辺

を訪れることも繰り返しながら、水辺を良くしていきたいと思う。今回のこの企画がそういう取り組みの一端になることを願っている。ありがとうございました。

以上。